

フルート協奏曲 K.284e および K.deest 再発見に虚を突かれたモーツァルト研究

野口秀夫

1. はじめに

鳥代：モーツァルテウムニュースサイトを見ていたら、2016の暮れから強烈な見出しの記事が掲載されているのに驚きました。『過失または意図的な誤解？“再発見されたモーツァルトの”フルート協奏曲』というタイトルで、再発見者の発表内容と当人との遣り取りに関して、モーツァルテウム財団からの反論と断固たる処置が報告されているのよ^{注1}。

教授：穏健なモーツァルテウムにしては珍しい出来事だね。金銭的に大きな損害を被ったわけでもないのに、よほど対応が腹に据えかねたものとみえる。

犬輔：事の顛末を紹介してくれるかな。

2. 『過失または意図的な誤解？“再発見されたモーツァルトの”フルート協奏曲』とは

鳥代：ニュースはこう始まっているわ。「[トルコの]フルーティスト、シェフィカ・クトウルエル Şefika Kutluer とヴィニシウス・カタール Vinicius Kattah^{注2}率いる[オーストリアの]トゥッティ・モーツァルト・オーケストラ Tutti Mozart Orchester がヨハン・バプティスト・ヴェンドリング Johann Baptist Wendling (1723-97) のフルート協奏曲 ニ長調を演奏した^{注3}。演奏に当たり、モーツァルトがマンハイムから父宛てに送った 1777.11.22 の手紙の文言『カンナビヒのところのところにいたのですが、彼のところにヴェンドリング氏が来ていて、協奏曲を練習しました。ぼくは彼のために、この曲に楽器をつけてやりました』という部分を参照している。モーツァルトによるこの管楽器追加稿は K.284e の番号が付けられ紛失したとされてきた。カタールのプロモーション・ビデオによれば^{注4}、K.284e が最近ブラジルのフルーティスト、ジェームズ・ストラウス James Strauss によりスイスで再発見され、曲を分析。“すべてのモーツァルト専門家”と意見を交換したのち、これが間違いなく K.284e であるとトゥッティ・モーツァルトにより結論付けられたという」。

犬輔：モーツァルトによる管楽器追加稿 K.284e が発見され、ヴェンドリングの協奏曲と一緒に演奏されたのなら喜ぶべき大ニュースですよ。早く聴きたいですね。CDはまだですか。

鳥代：早まっはいけないわ。ここからがモーツァルテウムの反論よ。「この発見は商業化で浮足立っているが、以下の理由によって信ずるに値しないものである」と続くわ。

犬輔：それは異なることを…。

鳥代：「その曲[管楽器を伴うヴェンドリングの協奏曲]は新発見ではなく、1999年に豪州^{オーストラリア}のフルーティストであるエミリー・ガンソン Emily Gunson がヴェンドリング関連の博士論文を発表したときから研究者の間では知られていた。彼女によればガンソン番号 GUN 20 のこの曲は1778年に作曲されているが、モーツァルトとの関わりを示す特別な表徴はない。それゆえ、モーツァルトの処置が施されたヴェンドリングの協奏曲は失われた可能性が高く、そうでないならばモーツァルトの管楽器追加部分が保存されなかったか、いずれかである」。

犬輔：ほう、研究成果が参照されましたね。

鳥代：続いて2つ目の反論よ。「この協奏曲の唯一のコピーはスウェーデンのルンド大学図書館で見ることができる。カタール氏はビデオで“スイスから”としか述べていないが、ビデオにはスウェーデンの図書館印が写っている」。

犬輔：おや、揚げ足取りになってきました。

鳥代：3つ目はこうです。「“モーツァルト専門家たちと email を交わしたのち”と言え、これらモーツァルト専門家たちがカタール氏の考えをさらに推し進めるように力を貸したかのごとく聞こえる。事実は逆であり、2016.9.2 付け email でザルツブルク・モーツァルテウム財団はカタール氏に所論の構築が不十分である旨を伝えた」。

犬輔：再発見はカタール氏の思い込みに過ぎなかったと言うんですね。カタール氏形無しだ。

鳥代：止(とど)めはこれよ。「モーツァルテウム財団は 1777.11.22 付けモーツァルトの手紙の画像が出典を明らかにせず宣伝ビデオに乱用されたことに強く抗議し、同時にモーツァルテウムが管理する全画像の使用許可を与えないことを通告した。かかる行為は厚顔無恥であり、モーツァルテウム財団がこの発表の“発見”にかかわっているとの誤解を与えかねない。2016.9.2 付け email でカタール氏にそうならないようにと、きつく申し入れをした」。

犬輔：せっかくの話題がこんな結末では残念なことです。カタール氏の言い分も詳細に聞いてみたいものですね。何故既知の曲を K.284e に結び付けたのか…。

教授：それならばカタール氏に聞くのは止めた方がいい。ニュースをよく読めば分かる通り、彼がビデオで発表したのは、ブラジルのフルーティスト、ジェームズ・ストラウスからの受け売りのようだからね。そちらのルートを調べてごらん。

犬輔：あれっ、吃驚（びっくり）です。別のところでもバトルが繰り広げられていました^{注5}。当のジェームズ・ストラウスは2017.1.28付けで「カターは私の研究を盗もうとし、数回の私との交信の後、電波に乗せてしゃべりまくっている」と息巻いているんです。

鳥代：それはますます穏やかではないわね。でも、ジェームズ・ストラウスはそれに続いてオリジナルの詳しい情報を書いているのでしょうか？

犬輔：そうです。ストラウスは正しくスウェーデンの筆写譜を参照したと述べています。但し、オリジナルタイトル“Concerto | per il | Flauto Traversiere Principale | Violino 1mo | Violino 2do | Cornu 1mo et 2do | Due Oboe | Basso continuo et ripieno | del Sig. Wendling | 1778.”が彼の引用では脱字と恣意的な追記を混在させたものとなっています。

鳥代：伝言ゲームの発信人にやっと辿りついたけれど、なんだか心許ないわ。

犬輔：彼はさらにこう言っています。「1）筆写譜に記入された1778はモーツァルトの手紙の1777.11.22から40日という非常に短く妥当なインターバルを我々に与えてくれる」。

鳥代：その論理は怪しいわね。曲を練習していた日に楽器を追加したと手紙には書かれていますので、弦楽器だけで完成し練習できる状態であったものに、管楽器を付けた1777.11.22が最終完成日、すなわちGUN 20の作曲日となるはずよ。演奏会はすぐであったでしょうから筆写譜の【作曲】日付に40日以上の差は大き過ぎだわ。

犬輔：ヴェンドリングが演奏会后、さらに手直しをして、最終版として完成したのが1778だったのかもしれない。

教授：もしそうならGUN 20からK.284eを切り出すことが不可能になるね。面白い指摘だ。

犬輔：次に行きましょう。ストラウスによれば「2）ヴェンドリングは1749-1781に13曲のフルート協奏曲を作曲している。そのうちの1曲だけがモーツァルトの協奏曲の楽器編成と同じ（2Ob、2Hr、弦楽器）である。それが1778のGUN 20だ」とのことです。先ほど紹介のあったガンソンによる作品表からフルート協奏曲の部分を見てみましょう^{注6}。ついでにモーツァルトの1777までの協奏曲の楽器編成もです。

表1 J・B・ヴェンドリングのフルート協奏曲

GUN	op.	調性	オーケストラの楽器編成	作曲年	備考
1	—	ト短調	弦	1749?	スコアとパート譜が現存
5	—	ハ長調	弦、2Ob、2Hr、2Tp、Timp	1769	Vn2 パート以外現存
6	—	イ長調	弦	1769	現存
7	—	イ長調	弦	1769頃	現存
9	4	ト長調 ニ長調	弦、2Hr	1769	2巻の手稿譜が現存 作品4の出版譜は散逸
11	—	ハ長調	弦	1771	散逸
12	—	ト長調	弦	1771	散逸
13	—	ト長調	弦	1771	散逸。1783の出版譜現存
18	—	ハ長調	弦	1775頃	現存
19	—	ニ長調	弦、2Hr	1777	出版譜“No.3”が現存
20	—	ニ長調	弦、2Ob、2Hr	1778	現存
24	—	ト長調	弦、2Hr	1781	散逸
26	—	ハ長調	弦	不明	現存。IMSLPでは1753頃?

表2 モーツァルトの1773-77の協奏曲

K ¹	K ⁶	調性	オーケストラの楽器編成	作曲年	備考
175	—	ニ長調	弦、2Ob、2Hr、2Tp、Timp	1773	クラヴィーア協奏曲
191	186e	変ロ長調	弦、2Ob、2Hr	1774	ファゴット協奏曲
207	—	変ロ長調	弦、2Ob、2Hr	1773	ヴァイオリン協奏曲
211	—	ニ長調	弦、2Ob、2Hr	1775	ヴァイオリン協奏曲
216	—	ト長調	弦、2Ob (2Fl 持替)、2Hr	1775	ヴァイオリン協奏曲
218	—	ニ長調	弦、2Ob、2Hr	1775	ヴァイオリン協奏曲
219	—	イ長調	弦、2Ob、2Hr	1775	ヴァイオリン協奏曲
238	—	変ロ長調	弦、2Ob (2Fl 持替)、2Hr	1776	クラヴィーア協奏曲
242	—	ハ長調	弦、2Ob、2Hr	1776	クラヴィーア協奏曲
246	—	ハ長調	弦、2Ob、2Hr	1776	クラヴィーア協奏曲
261	—	ホ長調	弦、2Fl、2Hr	1776	ヴァイオリン協奏曲楽章
269	261a	変ロ長調	弦、2Ob、2Hr	1775-77?	ヴァイオリン協奏曲楽章
271	—	変ホ長調	弦、2Ob、2Hr	1777	クラヴィーア協奏曲
—	271k	ハ長調	弦、2Fl、2Hr	1777	オーボエ協奏曲

鳥代：ストラウスの言い分を否定はできないけれど、モーツァルトは 2Ob、2Hr 以外の組み合わせを使っていないわけではないし、ヴェンドリングも 2Ob、2Hr を使った曲を書いたこともあるのだから、決め手はそのような習慣ではなく、追加する必要性だわ。ここで、ヴィオッティのヴァイオリン協奏曲 ホ短調 [第 16 番] のためにモーツァルトが 2Tp、Timp 声部を追加した K.470a を思い出しましょう。「楽器編成をより豊かにするため」と言われているわね⁷。表 1 と表 2 を見ているとどうしても K.284e は 2Ob、2Hr、2Tp、Timp 声部ではないかという期待も湧いてくるわ。その場合ニ長調やハ長調が有力になってくるわね。

教授：それなら GUN 20 を聴いて 2Ob、2Hr が「楽器編成をより豊かにする」効果を発揮しているかどうかで“当説に乗る／当説から下りる／別説に乗り換える”を決めてはどうかね。

鳥代：はい、予断を持たずに聴いてみましょう。楽しみだわ。

犬輔：最後にストラウスはこう言っています。「3) GUN 20 の第 1 楽章と第 2 楽章それぞれに、モーツァルトとヴェンドリングを繋ぐヒントの引用楽句がある。第 1 楽章 11-12 小節 (45-46 小節、149-150 小節も) がモーツァルトのフルート四重奏曲 ニ長調 K.285 の第 1 楽章 120-121 小節、54-57 小節[?]と似ている。またアダージョ楽章の 13-14 小節、49-50 小節がモーツァルトのフルート協奏曲 ニ長調 第 1 楽章 35-38, 小節と 24 小節に似ている」。

鳥代：ヴェンドリングがモーツァルトに影響を与えた証拠だというのね。だけど、本当に似ているのかしら。それに、メロディの類似性を言い出すと途端に論述の質が低下するものよ。

教授：なお、今回の説はモーツァルトの追加管楽器が埋め込まれた筆写譜が残っているとして GUN 20 が最も近いという推測だが、追加譜は別紙に書かれたまま紛失してしまったとすれば、弦楽器だけの曲も候補になりうる。その仮定の下に、バイエルン国立図書館所蔵のヴェンドリングのフルート協奏曲 ト短調 GUN 1 のパート譜 “Concerto Ex G: Mol: | Flauto Traverso Principale | Duo Violino | Viola | Con | Basso. | Del Sig: Wendling” の書誌データは大胆にも “Wendling, Johann Baptist / Mozart, Wolfgang Amadeus [Arr.]: Concertos, fl, vl (2), vla, b, KV 284e, g-Moll - BSB Mus.ms. 21904” と同定解釈されている。しかし、書誌データの脚注には「疑わしい」とのコメントも付されている⁸。

鳥代：流石にバイエルン国立図書館は慎重ですね。

教授：また、ケツヒェル第 6 版では、発刊された 1964 当時ヴェントリングのフルート協奏曲は弦楽伴奏の 2 曲しか知られていなかったが、K.284e がそのうちのいずれかに関連していると決めつけるのではなく、「モーツァルトの言う楽器とは管楽器のことである」「そして紛失している」という方向に話をもっていつている。これも流石だ。

犬輔：それでは、ヴェンドリングのフルート協奏曲 ニ長調 GUN 20 をジェームズ・ストラウス (フルート)、エンユ・サエル・オラマ Enyu Sael Orama 指揮、ヴェネズエラ・アラグア交響楽団 Orquesta Sinfonica de Aragua, Venezuela の演奏で聴きましょう。K.284e が含まれているかどうかにかかわらず、この演奏が GUN 20 の世界初演だと謳っています⁹。

3. モーツァルトのフルート協奏曲 ニ長調 K.deest ?

教授：さらに別のサイトでジェームズ・ストラウスは、もう一曲、モーツァルト作とされたオーボエ協奏曲を 2016.7 にポーランドで発見したと言っている¹⁰。そして妄想に近い話を展開する。「1777.7.25 にザルツブルクでフルーティストのヨハン・トーマス・カッセル Johann Thoms Cassel がモーツァルト作曲のフルート協奏曲を練習している。モーツァルトは当時、他に知られたフルート協奏曲を書いていないので、おそらく知られていない曲のうちの一曲であるこの曲は失われてしまったのであろう。ポーランドの手稿譜はひょっとしたらこの協奏曲からの編曲であると考えたと話をもっともらしくなる。我々はフォルテ・ピアニストのアンダーズ・ムスケンス Anders Muskens による専門的な再構成をここに提供する」。

鳥代：この話はモツァルテウムニュースには載っていなかったわね。

犬輔：あきれて相手にもされなかったのかな。

教授：その辺のいきさつは音楽受容史の専門家リンダ・シェイヴァー=グリースン Ph.D. Linda Shaver-Gleason が彼女の友人の友人ブルース・アラン・ブラウン Dr. Bruce Alan Brown から聴取している¹¹。かいつまんで言えば例のカターと email を交わしたブラウンは、示された資料が両協奏曲のソロ・パートのみの見えにくい pdf ゆえ、賢明にもモーツァルトに関するものかどうかの質問には答えを保留した。またオーボエ協奏曲に Del Sig: r Mozart と書かれていることについても写譜師の判断にすぎないと伝えたとのことだ。カターからの主張が控えめだったのは既にモツァルテウムのウルリヒ・ライジンガー Dr. Ulrich Leisinger からオーボエ協奏曲がモーツァルトによるものか疑わしいとの回答を得た後だったからだ。だが、カターはモーツァルトがこの協奏曲にかかわった可能性の極端な低さにすら自分たちは“興味”を持つのだと確信的に言っていたのけたというのだ。意表を突く程度が高いほど面白いという意味ならば、これは人気商売の極意かも知れないね。

鳥代：そのフルート協奏曲 ニ長調 K.deest とやらも、ついでに一度聴いておきましょう¹²。

4. モーツァルトのフルート協奏曲に関連する最新研究の整理

教授：モーツァルトのフルート協奏曲はドジャンのために書いたとされるト長調 K.313、ニ長調 K.314 が知られているが、彼のために書かれたフルート四重奏曲も含め、矛盾した学説が乱立している。今回はその虚を突かれた可能性もあるので、私なりに矛盾の解決を試みた仮説を紹介しておくのも無駄ではなかろう。表にまとめたので順に説明していこう。

表 3 ドジャンのために作曲した曲数（推定）

項目	フルート協奏曲					フルート四重奏曲					
	①	②	③	④		①	②	③	④	⑤	⑥
注文曲数	○	○	○	?		○	○	?	?	?	?
1777.12.10 信	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○
1778.1.31 状況	▲	▲	○	○	○	●	●	○	○	○	○
1778.2.14 売却	()	●	●	-	-	(●)	●	●	-	-	-
1778.10.3 存否	自筆譜	紛失	紛失	-	-	自筆譜	紛失	紛失	-	-	-
該当曲	緩徐楽章： K.315	両端楽章： K.313を改訂	K.deest	-	-	K.285	K.deest	K.deest	-	-	-

○：作曲予定曲、▲：作曲中あるいは完成した曲、●：自筆の完成曲、()：筆写譜で売却

犬輔：ドジャンからの注文については 1777.12.10 付けのマンハイム発、父レーオポルト宛の手紙があります。「いつものように、ぼくはヴェンドリングのところへ食事をしに行きました。すると彼はぼくに『例のインド人 [ドジャン] は [中略]、とにかくほんとうに稀にみる人物です。もしあなた [モーツァルト] がフルートのための 3 つの小さな、軽い、短い協奏曲と、2 つの [ein Paar] 註13 四重奏曲を彼のために書けば、彼は 200 フローリンをくれます』と言いました。[中略] この 2 か月、たっぶり作曲するものがありそうです。協奏曲を 3 つ、四重奏曲を 2 つ [2 quartette]、…」。

鳥代：曲の単価を高く見せるためにこの手紙では注文曲数を過少報告しているという話を聞いたことがあるわ。表 3 で教授が疑問符を付けた分がそれに当たるのね。その上の行に書かれている注文曲数と比較してのことですが、なぜ真の注文数が分かるのですか。

教授：それは、1778.2.14 付け父レーオポルト宛の手紙で「ドジャン氏も [ヴェンドリングやラムと一緒に] あすはパリへ発ちますが、彼のために 2 つの協奏曲と 3 つの四重奏曲しか作曲しなかったの、ただ 96 フローリンをくれただけです。(これが約束の半分だとすれば、彼は 4 フローリン間違えています)[中略]あとの作品はいずれ送るつもりです」とあるからだ。これは注文の半分しか作曲していないということで、半額からペナルティの 4 フローリンを引いて 96 フローリンになる。つまり注文されたのは協奏曲 4、四重奏曲 6 だった註14。

犬輔：ドジャンに提出した曲に関する従来の説はフルート協奏曲 K.313、K.314 そして四重奏曲 K.285、K.285a、K.285b であったと言われています。教授の説はずいぶん違うんですね。

教授：私の説でなくても、現在では K.313 と K.314 の両方とも自筆譜が残っていないのでドジャンのために作曲されたのかどうか疑われ出している。K.285a と K.285b は疾うにモーツァルトの作品ではないと指摘されている。これを評して私は“学説の乱立”と言ったのだ。

鳥代：表の 1778.1.31 という日付は何の日ですか。

教授：モーツァルトが母親に戯れ歌の手紙を出した日だ。「ヴェンドリングさんは御機嫌ナナメ、／ぼくがほとんど書かナイタメ。／でもライン橋で旅をオエ／ぼくがオイエに戻り着き／4 つの四重奏書き遂げりヤ／尻尾呼ばわりヤ避けられる。／協奏曲の作曲はパリに行くまでタナアゲ、／着くや一番糞にカキアゲる」。つまりこの日までほとんど作曲は進んでいなかったが、四重奏曲は作曲済の 2 曲 (K.285 ともう 1 曲) 以外に 4 曲書く予定であった。また協奏曲の作曲 (das concert は作曲行為の中性名詞と解釈されるので曲数を表してはいない) はパリに行くまで棚上げにするという。既に完成した協奏曲があるのかどうかは不明だ。

犬輔：フルート協奏曲は何故ト長調 K.313 とアンダンテ ハ長調 K.315 の組み合わせなんですか。

教授：先ほども引用されていた 1777.7.25 のシーデンホーフェンの日記の記述、「[午前] グセツティのところを訪ねたが、そこで、晩に息子のモーツァルトが姉さんのために演奏しようとしていた曲の演奏があった。これはシンフォニアとヴァイオリン協奏曲『書簡全集』では K.271i から成っていたが、協奏曲のほうは息子のモーツァルトが弾いた。それにフルート協奏曲。これはコントラバス奏者のカッセルが吹いたが、すべて息子のモーツァルトの作だった」と報告している中の、フルート協奏曲が問題だ。先ほどのストラウスはこれをポーランドで発見したオーボエ協奏曲と関連付け、フルート協奏曲 ニ長調 K.deest をでっち上げた(再構成?)。一方『邦訳書簡全集』は K.314 のことであると解説している註15。そしてシーデンホーフェンの日記の編集者ルードルフ・アンガーミュラーは「この曲は多分 K.313 であり、既にザルツブルクで作曲されていた。『ケッヒェル第 6 版』が推定している“おそらく 1778.1 あるいは 1778.2 マンハイム”ではない」と述べている註16。

犬輔：その K.313 をマンハイムでドジャンのために改作したということですか。なるほど。

- 教授：作曲の順を追っていくと、モーツァルトはまず、四重奏曲 K.285 を完成。自筆譜に“1777.12.25 マンハイム”と記入した。そして持参してきた K.313 の第2楽章をより易しい書き下ろし曲 K.315 に差し替え、K.313 の第1・3楽章（部分的に易しく書き換えられたであろう）と組み合わせた（K.285 と K.315 は自筆譜を手元に残し、提出用に筆写譜が作成された）。
- 犬輔：パリまで同行して契約を完遂しようとしたけど、ドジャンが先にパリに行くことになったため、1778.2.15 までの残された時間内で作曲と写譜とを急がざるを得なくなったんだ。
- 鳥代：ドジャンに渡せたのは協奏曲が ①K.313(改訂自筆譜)+K.315(筆写譜)、②K.deest(自筆譜)、四重奏曲が ①K.285(筆写譜)、②K.deest(自筆譜)、③K.deest(自筆譜)なのですね。写譜が間に合わなかった分は自筆譜を渡し、パリで再会時に返却してもらった積りだったのだけ。
- 教授：自筆譜の運命は 1778.10.3 にモーツァルトがパリからの帰路、父宛てに書いた手紙に暗示されている。「あんまり作曲しなかったの、ぼくの新しい曲をそれほど持ち帰りません。——ドジャン氏のための3つの四重奏曲とフルート協奏曲は持っていません。というのは、彼がパリへ行ったとき、間違えて別の箱に入れてしまったので、そのままマンハイムに置いてあるのです。——でも彼がマンハイムに着いたらすぐに送ってくれると約束しました。——ぼくはヴェンドリングに頼っておきます」とある。だが、箱の間違いが事実としてもドジャンはマンハイムに戻るまでもなく、すぐに箱を回送させた筈である。私はドジャンが一旦購入した楽譜の返却に応じなかったためのモーツァルトの作り話だと思っている。
- 犬輔：なぜフルート協奏曲は2曲だったのにこの手紙では1曲しか述べられていないんですか。
- 鳥代：おそらく“K.313 改訂稿+K.315”は焼き直し曲ゆえ、“ぼくの新しい曲”ではないとして数に入れなかったのよ。それにしても、新曲の K.285 は筆写譜で渡し、自筆譜を手元に残していたのにもかかわらず、何故持って帰ると言っていないのですか。
- 教授：そこだけが引っかかるところだが、すべて自筆譜で渡したとうっかり錯覚したのだろう。
- 犬輔：これでスッキリしました。あくまでも教授の仮説ですけど。

5. まだ分からないことだらけのオーボエ協奏曲関連 —— まとめ

- 鳥代：オーボエ協奏曲 ハ長調 K.271k は 1777.10.15 付けレーオポルトからアウクスブルクの息子へ「もしオーボエ協奏曲が浄書でもされているなら、この曲は [中略] なにかおまえに利益でももたらしてくれるだろう」とあるものに間違いなく、後のモーツァルト一家の手紙に何度も“フェルレンディスのための協奏曲”として出てきます。でも、この曲をフルート用に編曲した K.314 はモーツァルトのものではないと最近疑われ出しているのね。
- 犬輔：オーボエ協奏曲 ヘ長調 (断片) K.293 は自筆譜が残されている曲で、オットー・ヤーンは上記フェルレンディスのための下書きではないかとしていたけど、アインシュタインがそれは K.271k であるとし、1783.2.15 付けヴィーンのモーツァルトから父に宛てた手紙「エステルハーゼ侯のオーボエ奏者が、[中略] もし新曲を1曲書けば、6 ドゥカーテンをくれるそうです」に相当する草稿が K.293=K³416f+K³416g=K⁶416f とされた。ところがアラン・タイスの五線紙の透かし研究からモーツァルトが 1778 パリあるいはマンハイムで主に使ったパリ製の用紙に書かれているということが分かり、ウルリヒ・コンラートは K.293 を“1778.秋マンハイムで作曲?”としたんです。クラヴィーアとヴァイオリンのための協奏曲 ニ長調 (断片) K.315f と同じ頃に着手し未完となったんですね。マンハイムのオーケストラが移転した先のミュンヘンで完成・演奏する積りだったのでしょうか。
- 教授：研究には修正がつきものだが、一部分の修正だけでは全体に矛盾が生じ、付け込まれる余地が生ずる。自分なりに矛盾を解決した仮説を持つておくことが重要だと分かったね。

注 (一部にリンクが埋め込んであります)

- 注1: Fahrlässige oder vorsätzliche Fehldeutung? Ein „wiederentdecktes“ Flötenkonzert „von Mozart“
 注2: ブラジル生まれの指揮者。ウィーン・シェーンブルン宮殿オーケストラとともに 2018.1 に来日する。
 注3: 2016.12.2 にイスタンブールの Zorlu Center で演奏された。
 注4: Lost 'Mozart' Flute Concerto to be performed in Turkey
 注5: Is this flute concerto a long-lost Mozart composition? (Probably not.)
 注6: Johann Baptist Wendling: List of Works
 注7: ケッセル第6版
 注8: Musikhandschriften der Bayerischen Staatsbibliothek
 注9: Johannes Baptist Wendling (1723-1797) Flute Concerto in D GUN 20
 注10: Mozart - 3 New Flute Discoveries CD
 注11: Is this flute concerto a long-lost Mozart composition? (Probably not.)
 注12: Mozart Flute Concerto in D Major - KV. Deest (Salzburg, July 1777)
 注13: Wolf-Dieter Seiffert: Schrieb Mozart drei Flötenquartette für Dejean? In MJB1987/88, pp. 267-275 によれば、ein Paar は注文数4の半分2で偽装したのだろう。バレれば“不特定の多数”の意味だったと言い訳できると。
 注14: ザスロー/カウデリー編・森泰彦監訳『モーツァルト全作品事典』のロジャー・ヘルヤーの解説 196頁。
 注15: フランス・ブリュッヘンはカッセル用 Fl 協奏曲が Ob に編曲されて K.271k となり、それをドジャンのために Fl に戻したのが K.314 だと述べている (『モーツァルト事典』)。この場合フェルレンディス協奏曲は紛失か。
 注16: Joachim Ferdinand von Schidenhofen Ein Freund der Mozarts, Die Tagebücher des Salzburg Hofrats (Herausgegeben und kommentiert von Hannelore und Rudolph Angermüller unter Mitarbeit von Günther G. Bauer), Verlag K. H. Bock, 2006, p.266. この説は Mozarts Dokumente seines Lebens, p.144 のドイチュによる注を敷衍したものである。

(2017年9月30日作成、2017年11月3日改訂)

後日の談話室にて——ドジャンとはどのような人物だったのか

教授：ドジャンをインド人と呼ぶのは、ヴェンドリングとモーツァルトの間で付けられたあだ名だった。1777.12.10の父宛ての手紙でモーツァルトはヴェンドリングの発言を直接話法で引用して「例のインド人は自分自身の財産で暮らしているオランダ人で、あらゆる学問の愛好者であり、しかもよく[ヴェンドリングのこと]の犬の友人で《崇拜者》です」と伝えている。今ではドジャンの研究が進んでいるから詳しく調べてみたまえ^{注17}。

犬輔：はい。フェルディナント・ニコラウス・ディオニージウス・ドジャン Ferdinand Nicolaus Dyonisius Dejean (1731-97) はボンで生まれました。父親はケルン選帝侯クレメンス・アウグストの酌取り(宴席での酒の酌人)だったそうです。

鳥代：選帝侯の奨学金を受けて、彼は1748から1754頃までパリとストラズブールの主だった医学・外科アカデミーにて研鑽、1754にミュンスターで選帝侯軍の外科医として採用されますが、アムステルダムでよりよい職を求め、1757に東インド会社VOCの外科審査官 Examinator Chirurgie による試験に合格します。そしてバタヴィア(今日のジャカルタ)へ向かう船の上級外科医 Opperchirurgijn を経て、バタヴィアを拠点としたアジアの貿易拠点に携わる様々なVOC船の船舶外科医として活躍しました。スマトラ、マレーシア、インド、セイロン、ペルシャなどを訪問、1762にはバタビア市の外科医に任命されたというわ。

犬輔：1767に未亡人の英国女性と結婚しています。1768に妻と2歳の義理の息子、5か月の息子を伴ってアムステルダムに戻り、「富豪としてアジアから帰国した」と言われています。1769に37歳にしてライデン大学で医学と化学の学問を専攻します。この年にライデンのフリーメイソンのロッジに入会しました(バタヴィアで既にフリーメイソンか?)。

鳥代：彼は1773.7.2に化学と医学の両方で博士号を取得し、同年に二つの論文がそれぞれ書籍として出版されているのよ。一つはカステーリャ石鹼(医療用石鹼)の分析関連の化学博士論文^{注18}、もう一つは眼科疾患の非手術的処置関連の医学博士論文^{注19}なの。そして不幸なことにその年の秋に奥さんを亡くしています。1774-1775ヨーロッパ各地を旅し、多くの自然科学者と意見を交換、その共通点は啓蒙化の理想に対する熱意だったというわ。

犬輔：1777春にはアーヘンにいたそうだけど、1777.11にマンハイムに来るんだ。バタヴィア以来の旧友を訪問したり、天文台(モーツァルトは1年後に訪問)に行ったりしているんだね。1777.12.9までにモーツァルトに作曲を依頼し、モーツァルトと一緒に宮中顧問官ゼラーリウスを訪問してもいる。そして1778.2.15パリに向かって出発する。その年はパリからロンドン、ハーグへ行っています(この時マンハイムには戻っていません!)。その後はドイツ・イタリアへの旅、再びハーグ・ロンドン・ヴィーンへの旅、ローマ・フィレンツェ・ナポリ・ヴィテルボ・シエナなどで停泊するイタリアへの旅、そしてカッセルに滞在している。

鳥代：1786/1787にスウェーデンとデンマークに滞在した後、30年ぶりに生まれ故郷のボンを訪問、南ドイツを旅行し、マンハイムに立ち寄っています(10年ぶりの再訪です)。1788痛風に悩まされ、ボヘミアのカールスバートで治療したドジャンは、1790夏/秋にヴィーンに定住しました。モーツァルトはこの時期フランクフルト旅行やコンスタンツェを見舞うバーデンへの頻繁な往来で忙しく、二人が会うチャンスはなかったでしょう。

教授：《魔笛》の舞台をドジャン所縁のインドネシアだとする蒸返し論は予め否定しておこう。

犬輔：1793には重度の黄疸のため、友人で同僚のザラーバ教授の治療を受け一時的に治癒したと言われています。ザラーバはモーツァルトの病床における主治医クロセットの対診相手として知られており、モーツァルトの葬列にもクロセットと共に参加していた人です。

鳥代：1797.2.23または24、ドジャンはおそらく慢性痛風の結果としての肝硬変によりヴィーンで亡くなり、1797.2.25聖マルクス墓地に葬られたということです。

教授：モーツァルトが1777.12.27の手紙で彼を《実直》と言っているとおり大変な勉強家だね。前半生に財を成し、後半生は旅行で各地を回って見聞を広めている。ヴィーン移住に先立って医療機材や蔵書を競売・寄付して身を軽くしているのは隠居の準備だったのだろう。もし、蔵書の中に自筆譜があったならば、いつか再発見されるかも知れないね。

犬輔：伝記からはアマチュアフルート奏者としてのドジャンは見えてきませんね。モーツァルトも演奏レベルが分からないからヴェンドリングの技量を参考に作曲したのではないかな。

鳥代：わたしは伝記を読んで、ドジャンの冷静な化学者の・医学者の思考からすれば、契約金の支払いに際して出来高からさらに違約金を引いたり、一旦購入した楽譜は返却せずという教授の仮説を、もっともなことだと納得したわ。

注(一部にリンクが埋め込んであります)

注17: Ferdinand Dejean, An eventful life in chronology

注18: Dejean, Ferdinand: Historia, analysis chemica, origo, et usus oeconomicus sodae hispanicae. Dissertatio inauguralis chemica-oeconomico-practica, Leyden 1773.

注19: Dejean, Ferdinand: De medicacione morborum ocularium sine operatione manuali. Dissertatio inauguralis medico-practica, Leiden 1773.

(2017年10月3日作成、2017年10月31日改訂)